

< 発達支援講演会を開催しました >

令和元年7月31日(水)に、札幌コミュニティプラザに於いて、支援者を対象として発達支援講演会を開催いたしました。今回は、齊藤真善先生(北海道教育大学札幌校准教授)をお招きし、「ディスレクシアの子どもたちが困っていること」というテーマで、読み書きに困難を抱える子どもたちを理解し、どのような手助けができるのかを、読み書きの習得の過程に沿って講演していただきました。その講演の内容をいくつか紹介します。

○読み書きの困り感は気付かれにくい

読み書きの困り感は、幼児期においては課題として気付かれにくいですが、小学校に入学して1,2年経って、習得度によって発見されるということが多い。また、顕著な困り感はなくとも、学年が上がってから、未だにカタカナを思い起こして書くことに困り感を持つ子どもも多くいる。漢字のみの習得の困り感ということは生じにくく、ひらがなの習得にも同様に課題を抱えていることが多い。ひらがなの五十音を正確に読めたとしても、音読が流暢に出来ないということもあるため、つまずきの原因がどこにあるのかを考えていかなければならない。



○体と一緒に言葉を身に付ける

漢字もひらがなも、繰り返しその形を覚えさせようとするにはあまり効果はなく、言葉の音を分割(“パンダ”はパ・ン・ダの3つの音)できなければいけない。文字の形を覚えるのではなく、言葉を分割したり、統合していくことが出来なければ、ひらがなの習得は難しい。このような音韻的な操作能力がどれぐらいなのかを知ることは、幼児期にとって重要なことであり、言葉遊びをした時に、スムーズにできたかどうかといった様子も、学校に入学していく時には引き継いでいくことがとても大切になる。音韻的な意識を育てていくためには、しゃべりながらや歌いながらでも、手や足を使用してリズムを取る活動が有効である。言葉とリズムが一致した時に、言葉の音のまとまりの中に、切れ目ができてくる。特別な活動は必要なく、誰でもどこでもできる遊びが、音韻的な意識を育てる上で意味があるのである。



○子どもに合わせた支援を

読み書きは、生活の中で同じ活動を繰り返していくことで、積み重なっていくもので、読み書きは考えるのではなく、日々の生活の中で繰り返し、体に染みこませるように身に付けていくことが大切である。また、読んだり書いたりする困難を抱えている子にとっては、それによって他の事を行ったり、考えたりすることが大変になるため、他のことにまで同時に意識を向けることが難しくなる。読んだり書いたり計算することは、あくまで考える上でのツールであり、考えることを深めていくためには、代用できるツールの工夫も必要なことである。